

史跡保渡田古墳群
井出二子山古墳

— 史跡保存修理事業に伴う発掘調査概報 —



2006

高崎市教育委員会

序

平成18年1月23日、高崎市・群馬町・箕郷町・新町・倉渕村が合併し、新高崎市が誕生しました。これによって本市は、特別史跡山ノ上碑及び古墳・金井沢碑を筆頭に、史跡浅間山古墳・大鶴巻古墳・観音山古墳・観音塚古墳・日高遺跡・保渡田古墳群・北谷遺跡・上野国分寺・箕輪城跡の11箇所におよぶ一級の国指定歴史資産を保有することになりました。

これだけの数の国史跡が一市に存在する例は、東日本においてはきわめて稀有なことであり、本市一帯が歴史的に重要な位置づけを有することが一目瞭然となります。とくに古墳時代遺跡の充実ぶりは東国随一であり、我々市民が誇りとすべきものだと言えます。

ただし、歴史とは時の彼方を懐かしむものではなく、これに学び、今後の人間社会のよりよき発展に生かすべきものです。往古、なぜこれほどまでに高崎市域の地域力が旺盛であったかを謎解き、これからの地域づくりの糧としなくてはならないでしょう。

さて、本書に紹介する史跡保渡田古墳群（井出二子山古墳）は、こうした歴史資産のひとつを構成する存在です。すでに同古墳群の八幡塚古墳は復元整備され、美しい史跡公園となり、人々の憩いの場、子供たちの学習の場として有効に機能しています。また、一部の教科書や多くの歴史書に引用され、国内・東アジアからも人々の往来する文化交流拠点としても作用しています。

これに引き続いて、保渡田古墳群のなかの二子山古墳についても平成15年度から整備事業に着手しています。この古墳の整備は、広大で魅力的な史跡公園（上毛野はにわの里公園）づくりの一翼を担うもので、完成がおいに期待されます。本書は、この史跡整備に伴う発掘調査の略報であり、掲載した成果をもとに、次年度から整備工事が進展することになります。

本書の刊行にあたって、これまでご指導・ご協力いただいた関係機関・関係者に厚く御礼申し上げ、巻頭の言といたします。

平成18年3月20日

高崎市教育委員会教育長 砂 田 威 夫

目 次

序・目次・例言

1. 保渡田古墳群保存整備事業の経緯	1
2. 歴史的環境	2
3. 平成15年度事業の概要	5
4. 平成16年度事業の概要	11
5. 平成17年度事業の概要	15
6. まとめ	19

例 言

1. 本書は、史跡保渡田古墳群のうち二子山古墳の記念物保存修理事業に伴う発掘調査概要報告書である。なお、同名の「二子山古墳」がほかにも存在するため、本書においては慣例に従い所在町名（旧大字名）の「井出」を冠し「井出二子山古墳」と表記する。本名称は既に考古学界においても認知されている。
2. 史跡保渡田古墳群は、群馬県高崎市（旧群馬町）井出町から保渡田町にかけて所在する。このうち井出二子山古墳は、高崎市井出町1403番地ほかにも所在する。
3. 史跡保渡田古墳群記念物保存修理事業（二子山古墳）は、平成15～19年度までの5ヵ年で実施される予定であるが、このうち平成15～17年度までの3ヵ年を確認のための発掘調査に費やした。本書は、この発掘調査の概略を紹介するものである。なお、整備事業の終了時には、正式報告を刊行する予定である。
4. 本書に関わる事業費として、文化庁の国宝重要文化財等保存整備費補助金が充てられた。
5. 本事業に関わる組織は以下の通りである。

①事務局

■ 群馬町教育委員会生涯学習課（平成15年度～平成18年1月22日まで）

教育長 鈴木越夫／生涯学習課長 桑原豊（平成15年度）、相澤郊三郎（平成16・17年度）／課長補佐 齋藤かずみ／文化財保護係長 若狭徹（本事業担当者）／文化財保護主事 田辺芳昭／行政嘱託員 山田琴子（調査業務補助）

■ 高崎市教育委員会教育部文化財保護課（平成18年1月23日より）＊決裁関連者のみ

教育長 砂田威夫／教育部長 石綿和夫／文化財保護課長 高木三昭／課長補佐 松本孝行・神戸聖語・齋藤かずみ／主任学芸員 若狭 徹（本事業担当）／行政嘱託員 山田琴子（整理業務補助）

②指導機関・指導者

指 導	小野健吉	文化庁文化財部記念物課主任文化財調査官（史跡整備部門）
顧 問	右島和夫	群馬県教育委員会文化スポーツ部文化課文化財主監
学術委員	坪井清足	財団法人元興寺文化財研究所所長（考古学・文化財学）
	大塚初重	明治大学名誉教授（考古学）
	渡辺達三	東京大学農学部教授（造園学）
	松島栄治	群馬県文化財保護審議会委員（考古学）
	梅澤重昭	元群馬大学教授（考古学）
	近藤義雄	かみつけの里博物館館長（中世史・地方史）
委 員	野村洋四郎	群馬町長（平成18年1月22日まで）
	鈴木越夫	群馬町教育委員会教育長（平成18年1月22日まで）
	飯島義雄	群馬県教育委員会文化スポーツ部文化課
	南雲芳昭	群馬県教育委員会文化スポーツ部文化課

6. 本書の執筆・編集は主任学芸員若狭徹が行った。
7. 本事業に関わる記録・出土資料は高崎市教育委員会が保管している。
8. 本事業にあたり下記の方々から指導・助言をいただいた（順不同）。感謝申し上げる。

小林三郎（明治大学）、白石太一郎（奈良大学）、杉山晋作（国立歴史民俗博物館）、高橋克寿（奈良文化財研究所）、中島啓治（元群馬県立自然史博物館）、土生田純之（専修大学）、日高慎（東京国立博物館）、宮代栄一（朝日新聞社学芸部）、山中章（三重大学）

1. 保渡田古墳群保存整備事業の経緯

史跡保渡田古墳群は、5世紀後半から6世紀初頭にかけて造営された3基の大型前方後円墳（二子山・八幡塚・薬師塚）から成り、この時期の上毛野（群馬県）地域を代表する首長墳である。また、本古墳群は、近くに存在する首長居館三ツ寺Ⅰ遺跡に対応する墓域としても重要性を有する。

本古墳群の保存及び整備は、上記のような歴史的意義を踏まえて計画されたものであり、昭和55年の開始から現在まで長期にわたっている。その経過はおよそ構想段階、公有化および八幡塚古墳整備段階、二子山古墳整備段階にまとめられる。以下、それぞれに概要を示す。

①史跡整備構想段階

・昭和55年度／群馬県教育委員会が県総合計画「新ぐんま計画」に、はにわ公園建設計画を盛り込む。群馬町教育委員会が土地改良事業に先立ち、保渡田古墳群の八幡塚古墳の第一次範囲確認調査（兆域西側）を実施。

・昭和58年度／県はにわ公園建設委員会で、はにわ公園3ヶ所の候補のひとつに保渡田古墳群を選定。

・昭和59年度／県はにわ公園建設委員会で、保渡田古墳群を最初に整備することを決定。群馬町教育委員会が史跡指定を目的として二子山古墳と八幡塚古墳第二次範囲確認調査（兆域東側）を実施する。

・昭和60年度／県が基本計画書を策定。保渡田古墳群が史跡に指定される（昭和60年9月3日）。群馬県「躍進ぐんま計画」に、はにわ公園構想が盛り込まれる。

②公有化及び八幡塚古墳を中心とする公園整備段階

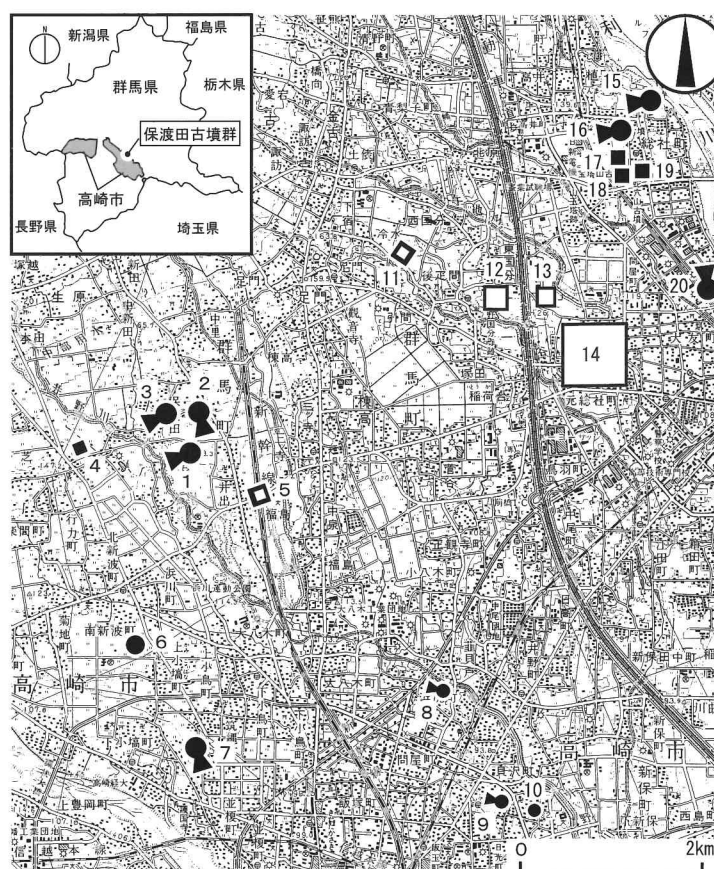
・昭和61年度／群馬町はにわ公園建設委員会が発足。事業主体が群馬町に移行する。保渡田古墳群（二子山・八幡塚）の公有地化を開始（先行取得）。

・平成2年度／保渡田古墳群（二子山・八幡塚）の公有地化を完了。

・平成3年度／高崎市等広域市町村圏振興整備組合により、群馬町はにわ公園内に資料館建設が内定する。

・平成4年度／群馬町はにわ公園建設委員会を改組。学術委員会を設置。群馬町はにわ公園の範囲（23ha）を決定。「群馬町はにわ公園建設事業基本計画」を策定する。

・平成5年度／八幡塚古墳整備事業（発掘調査）に着手（史跡等活用特別事業）。



1 井出二子山古墳(5c後) 2 保渡田八幡塚古墳(5c後) 3 保渡田薬師塚古墳(6c初)
4 下芝谷ツツ古墳(5c後・積石塚方墳) 5 三ツ寺Ⅰ遺跡(首長居館・5c後) 6 上小幡
稲荷山古墳(6c前) 7 上並榎稲荷山古墳(5c後) 8 浜尻天王山古墳(6c) 9 五霊
神社古墳(6c後) 10 聖天塚古墳(5c) 11 北谷遺跡(首長居館・5c後) 12 上野国分
僧寺 13 上野国分尼寺 14 上野国府推定域 15 遠見山古墳(5c後) 16 総社二子山
古墳(6c後) 17 愛宕山古墳(7c) 18 宝塔山古墳(7c) 19 蛇穴山古墳(7c) 20 王山
古墳(6c前)

図1 周辺主要遺跡分布図

群馬都市計画の変更（知事決定・上毛野はにわの里公園12.9ha・11月）。群馬都市計画公園事業認可（2月）。公園第1期整備事業に着手（八幡塚周辺整備・地域文化財保全事業）

- ・平成6年度／八幡塚古墳発掘調査。
- ・平成7年度／八幡塚古墳発掘調査・実施設計。資料館（かみつけの里博物館）本体工事着工。
- ・平成8年度／八幡塚古墳発掘調査・整備工事。
- ・平成9年度／八幡塚古墳整備工事。かみつけの里博物館展示工事・開館（3月）。公園第1期整備事業完了。
- ・平成10年度／八幡塚古墳整備工事。公園第2期整備事業に着手（二子山東側・休憩棟・工房・窯など）。
- ・平成11年度／八幡塚古墳整備工事。整備完了。公園第2期整備事業終了。

③二子山古墳の整備段階

- ・平成15年度／整備事業再開。二子山古墳整備事業（発掘調査）に着手（保存整備一般）。
- ・平成16年度／二子山古墳発掘調査。
- ・平成17年度／二子山古墳発掘調査・基本設計・実施設計。平成18年1月23日群馬町が高崎市と合併。
- ・平成18・19年度／二子山古墳整備工事（予定2ヵ年）。

2. 歴史的環境

（1）史跡保渡田古墳群の史的環境

史跡保渡田古墳群は、群馬県西部にある榛名山の東南麓に位置し、山麓基幹河川のひとつである井野川左岸に立地する。所在地の標高はおよそ130mである。古墳群から北方は榛名山の山麓斜面地、南方は緩斜面の湧水地帯となるが、南方一帯には古墳と同時期の水田遺構が火山灰に埋没している。このことから、保渡田古墳群は往時の非水田域と水田域の境界（土地利用の変換点）にあたる象徴的立地を選定し、造営されたと考えられる。

保渡田古墳群は、井出二子山古墳（本書に報告）、保渡田八幡塚古墳、保渡田薬師塚古墳の3基の大型前方後円墳によって形成される。それぞれ墳丘長は108m、96m、推定105mであり、二子山古墳→八幡塚古墳→薬師塚古墳の順で、5世紀後半から6世紀初頭にかけて造営された。3基の古墳とも主体部は東頭位と推定される凝灰岩製舟形石棺であり、二重周堀の広大な兆域を有する。また、前二者には内堀のなかに4基の中島が存在する。

保渡田古墳群は埴輪の充実でも知られ、3基とも人物・動物埴輪を樹立する。とくに八幡塚古墳では原位置をとどめた人物・動物埴輪配列区画が残されており、わが国の人物埴輪研究においてよく知られた存在である。円筒埴輪も各古墳に樹立されるが、二子山→八幡塚→薬師塚の順に型式（焼成方法や工人系列）が整備され、かつ軽量化が進行するなど、埴輪生産体制の進



図2 保渡田古墳群配置図

展が看取される。

二子山古墳の北から西に隣接して保渡田Ⅶ遺跡、井出北畑遺跡がある。ここでは、形象埴輪を多量に出土する区画のほか、帆立貝形古墳、円墳、埴輪棺、竪穴建物跡、土器集積（祭祀跡）などの同時代の遺構が検出されている。これらは保渡田古墳群の造営に強く関連する遺構である。とくに、帆立貝形古墳・円墳・埴輪棺などは首長の下部機構の構造を推定させるものである。

古墳群の南方1kmには、首長居館の三ツ寺Ⅰ遺跡が存在する。この遺跡は、存続時期がほぼ保渡田古墳群と重なるものであり、ここで地域経営を行った首長の奥津城がまさに保渡田古墳群であるとみてよい。また、居館の周囲には6世紀初頭に噴火した榛名山の噴出物に埋没した水田遺構、畠遺構、灌漑水路、集落跡、祭祀跡も検出されており、当時の社会構成が立体的に復元できる。さらには、同時期の積石塚や韓式系軟質土器などといった渡来文物も濃厚にみられ、社会経営の進展に渡来人とその技術が関わったことも明らかになっている。

このように、保渡田古墳群はそれ単体のみでなく、周囲に同時期の多様な文化要素を保有している点でも特筆され、古墳時代社会を考究するためにまたとないフィールドとなっているのである（若狭2003）。

（2）井出二子山古墳調査歴

続いて、井出二子山古墳の調査歴を概述する。

① 明治時代の盗掘伝承

本古墳の所在地である高崎市井出町地区には、本古墳石棺の開封伝承がある。明治時代、本古墳に三角点を設置する際に石棺が暴かれ、出土した遺物は地元寺院に納められたというものである（上郊村誌編纂委員会1976）。その後遺物は散逸したが、このうち馬鐸1点が横浜市のコレクターの手に渡り、近年群馬町（現高崎市）が買い戻しを行った。ただし、盗掘伝承が近代にも関わらず関連文書記録類が存在しないこと、今回の調査によって石棺開封時期が中世に遡る可能性が考えられること、出土伝承される馬鐸が石棺の時期よりも新しい型式であること（宮代2000）などが問題となる。したがって、この盗掘伝承は、今回の調査で三角点直下から検出されている第二主体部か、すでに削平されてしまった未知の主体部にかかわるものである可能性が高い。

② 昭和5年の調査

東京帝室博物館監査官後藤守一による学術調査である。これは、その前年に実施された群馬県による保渡田八幡塚古墳の調査

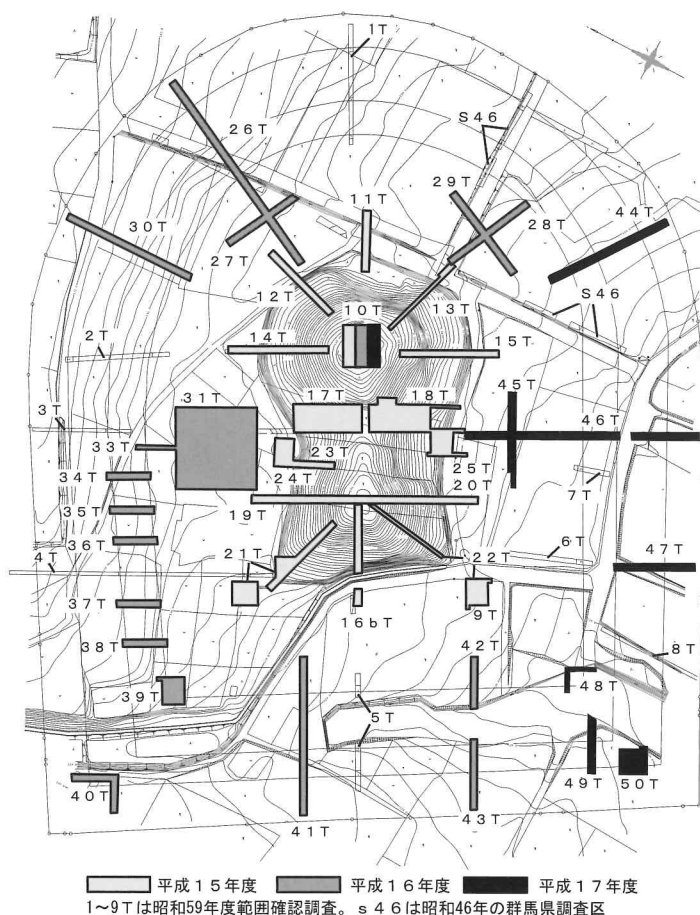


図3 年度別トレンチ配置図

(福島他1932)に刺激され、計画された。後藤は地元青年団を指揮して墳丘・周堀の各所にトレンチを設定し、主体部石棺・墳丘・二重周堀の構造や、内堀内の4ヶ所の中島の存在について明らかにしている(後藤1953)。また中堤北側で形象埴輪群を、中堤西側で顔面が表現された円筒埴輪棺を検出した。

③昭和46年の調査

群馬県教育委員会が県営ほ場整備事業に伴って農用道路部分を調査した。後円部東側に長い調査区を設定し、周堀・北東中島・墳丘下段を確認した(徳江1999)。

④昭和59年度の調査

群馬町教育委員会が、史跡指定に先立つ範囲確認調査を実施した(菊池・若狭他1985)。

主に古墳外縁の範囲確認に主眼を置き、外堀の立ち上がりなど周堀構造を把握し、かつ墳丘下段の確認も一部行った。このとき、本古墳が榛名山二ツ岳降下火山灰(Hr-F A)の降下以前に築造されたことを明らかにするとともに、出土円筒埴輪の資料化をはじめて行った。

その結果によって、昭和60年9月3日に保渡田古墳群が史跡に指定された。

昭和59年度調査の出土資料を基にして埴輪の型式学的検討が行われ、保渡田古墳群の築造序列が明確化された(南雲・若狭1985)。また、つづいて右島和夫が保渡田古墳群の総括的検討を行っている(右島1988)。

参考文献

上郊村誌編纂委員会 1976『上郊村誌』

菊池健一・若狭徹 1985『二子山古墳－範囲確認調査概報』群馬町教育委員会

後藤守一 1953「上野国愛宕塚」『考古学雑誌』39-1, 日本考古学会

徳江秀夫 1999『馬場東矢寺次Ⅱ遺跡・新川鎗木遺跡・井出二子山古墳・保渡田八幡塚古墳』群馬県埋蔵文化財調査事業団

南雲芳昭・若狭徹1985「保渡田3古墳の埴輪」『埴輪の変遷』北武蔵古代文化研究所・群馬県考古学研究所・千曲川古文化研究所

福島武雄他 1932『群馬県史蹟名勝天然物調査報告』第二輯, 群馬県

右島和夫 1988「保渡田3古墳について」『三ツ寺Ⅰ遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団

宮代栄一 2000「保渡田八幡塚古墳出土の馬具および出土伝承遺物」『史跡保渡田古墳群・保渡田八幡塚古墳』群馬町教育委員会

若狭徹他 2000『史跡保渡田古墳群 保渡田八幡塚古墳』群馬町教育委員会

若狭徹 2003『古墳時代の地域社会復元－三ツ寺Ⅰ遺跡』新泉社

3. 平成15年度事業の概要

平成15年度は二子山古墳保存整備事業の初年度であり、発掘調査によって墳丘構造を明らかにすることに主眼を置いた。本古墳では、昭和59年度に史跡指定に先立つ範囲確認調査が実施され、主に周堀部分を対象として9箇所の調査区が設定されている。このため、平成15年度以降の調査区名称はこれに続いた連番とし、10トレンチから開始し、25トレンチまでの15ヶ所の調査区を設定した。調査面積は約1200㎡である。

(1) 調査概要

10トレンチ／後円部墳頂に設定した。樹木を伐採して掘り下げを行い、盗掘を受けている主体部舟形石棺の清掃調査を実施した。掘削土砂は全て保存し、篩い作業および水洗選別作業を行った。この結果、細片ながら盗掘時に粉碎された多量の遺物を検出した。

11・16トレンチ／墳丘主軸を縦断する調査区であり、後円部下段、前方部の上中下段の葺石を検出した。

12・13トレンチ／後円部45度に振り出した調査区である。12T（以下トレンチはTと略述する）では墳丘上・中・下段の葺石を確認。13Tは破壊が著しく、墳丘下段葺石のみ検出した。

14・15トレンチ／後円部の主軸に直交した位置に設定した調査区。双方から墳丘部上中下段の葺石を検出。

17・18・23・24・25トレンチ／両くびれ部を確認するために、主軸を横断して設けた調査区である。ここでは墳丘くびれ部の各段の葺石を検出した。この部分は、表土の堆積が厚いために最も遺構の遺存度が良好であった。葺石のサイズは、下→中→上段の順に大きくなることから、仕上がりの遠近感を勘案して石を用いたと考えられる。また、18・19Tでは中段テラスの円筒埴輪列が良好な状態で残り、19Tでは下段テラス円筒埴輪列がわずかに原位置をとどめていた。埴輪は密着状態で列状に配列されている。円筒埴輪は5条6段構成のものがあり、保渡田古墳群の他の2古墳より大型の埴輪を採用している。

なお、18T中段円筒埴輪列では埴輪の立て替え事例が見つかっている。古墳完成後しばらくしてから中段テラス縁部が崩壊したため、破損した埴輪を埋め込んでテラスを再構築し、未破損の埴輪を再利用するとともに、不足の埴輪を新たに補ったと観察される。新補の埴輪は3条4段構成の小型円筒埴輪で、二子山古墳よりも後出する形式であり、保渡田古墳群の存続期間中は二子山古墳の営繕・管理が行われたことを示すものである。

19・20トレンチ／前方部中央の主軸に直交した位置に設置した調査区である。19Tでは3段分の葺石を検出した。20Tは破壊が著しく中段葺石のみ残存した。また、前方部墳頂にはなんらの施設も確認されなかった。

21・22トレンチ／前方部の両隅角の確認を目的として設置した。両トレンチで下段の葺石を検出したが、上・中段は破壊が著しく、21Tで中段葺石の一部が残存したのみであった。

調査と併行して遺構測量・航空写真撮影委託を実施し、堀底に堆積したテフラの分析委託も行った。調査終了後、葺石は土嚢を積んで養生し、調査区全体に苦土石灰を散布して埋め戻した。石灰の散布は将来の再掘時の目印とするためである。また、調査と併行して一部の遺物整理作業を実施。

3月には整備委員会（群馬町はにわ公園建設学術委員会）を開催し、石棺の詳細調査の継続と、埴輪立替事例の型取りが指示された。また調査成果を報道すると共に現地説明会を実施、約1000人の見学者を記録した。

(2) 小結

平成15年度調査では、本古墳墳丘の3段築成の構造を明確化した。また墳長が108mであること、現状の墳丘形状と比べ、築造時の原形はくびれが強い形態になることなども明らかにした。ただし、墳丘部の残存状況は良好とはいえない。下段葺石は地表下に埋没していたため大半のトレンチで残存していたが、下段テラス面は削平され、埴輪列はほとんど残存しなかった。上・中段葺石は各所で破壊されており、残存部においても下半分が残る程度である。中段埴輪列はくびれ部を中心に残ったのみであった。墳頂部は大きく破壊されており、石棺は被覆土を除去したところ、昭和初年に石垣を組んで整備していたことが判明した。

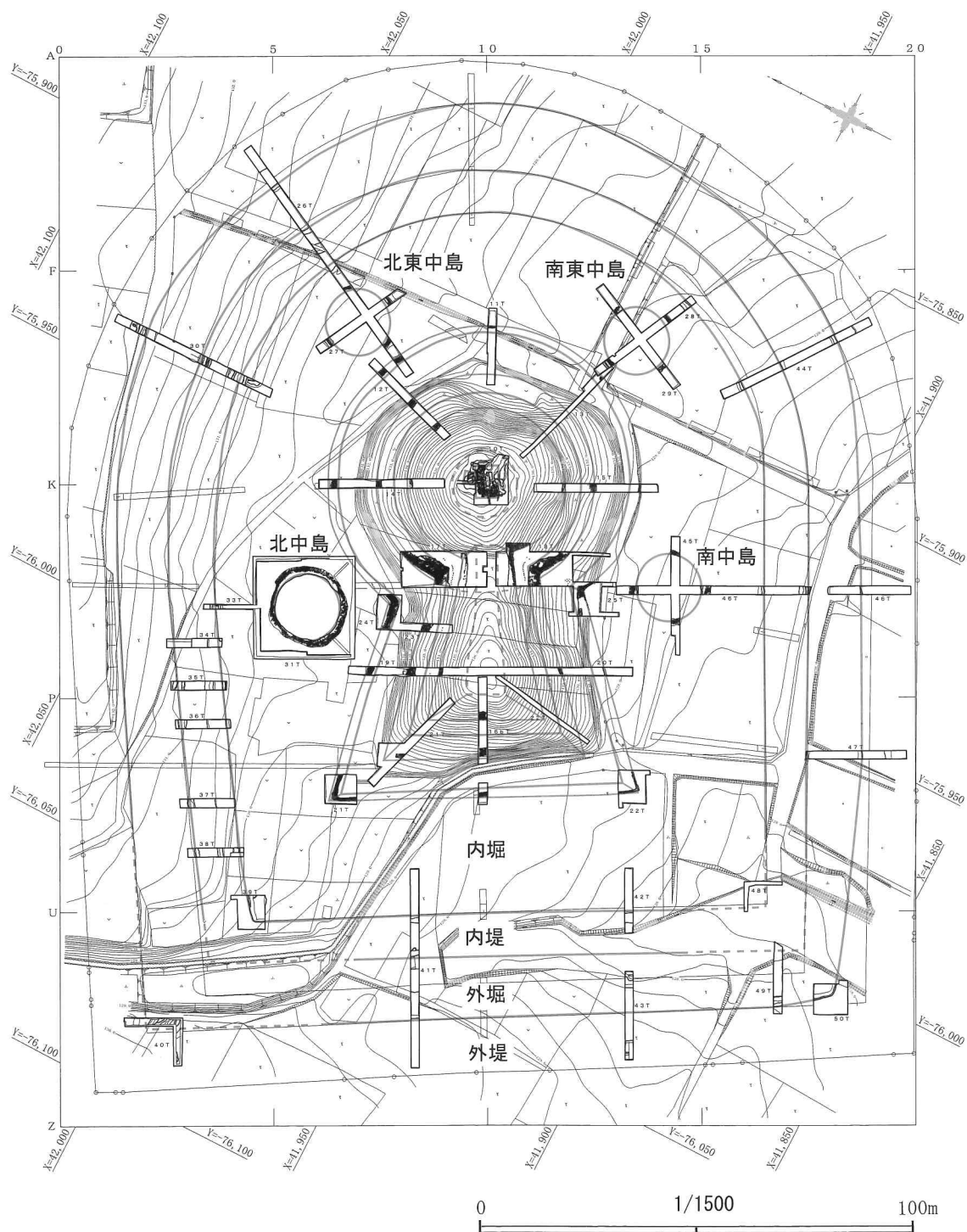


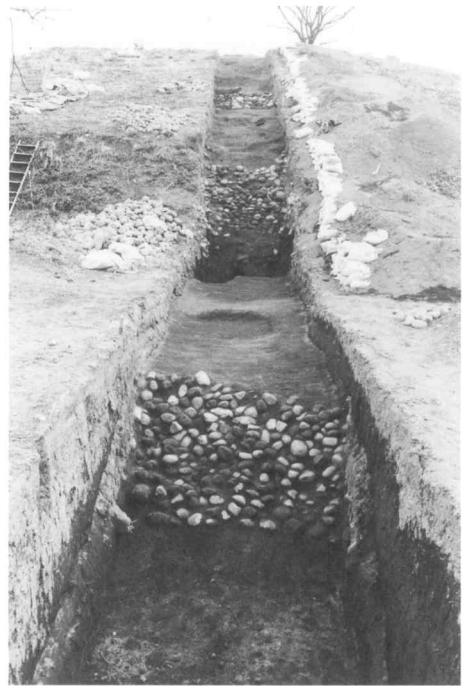
図4 井出二子山古墳調査全体図



墳丘部調査全景航空写真



後円部墳丘南側調査 (15トレンチ)



前方部墳丘北側調査 (19トレンチ)



前方部墳丘西側主軸上調査状況 (16b トレンチ)



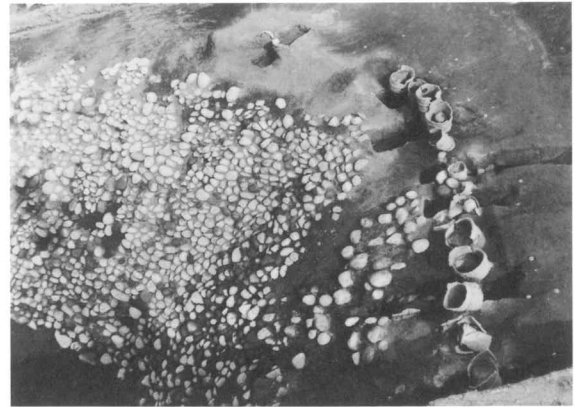
後円部墳丘北東側調査状況 (12トレンチ)



墳丘北側くびれ部中段・下段全景 (17・24トレンチ)



墳丘北側くびれ部中段葺石 (17トレンチ)



くびれ部中段葺石及び中段テラス埴輪列 (17トレンチ)



北側くびれ部中段テラス埴輪列 (17トレンチ)

中段円筒埴輪列の立直しの状況 (17トレンチ)



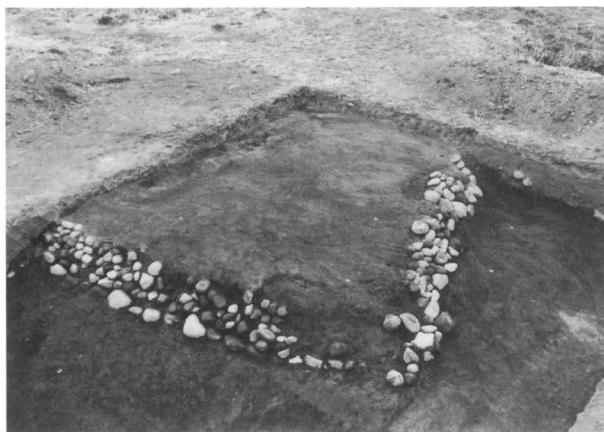
墳丘南側くびれ部全景 (18・25トレンチ)



墳丘南側くびれ部上段・中段葺石・中段埴輪列 (18トレンチ)



墳丘南側中段埴輪列 (18トレンチ)



墳丘下段南隅角 (22トレンチ)



墳丘下段北隅角調査風景 (21トレンチ)



墳丘下段北隅角（21トレンチ）と墳丘全景



墳頂部舟形石棺検出状況（10トレンチ・東から）



石棺調査風景



現地説明会風景

4. 平成16年度事業の概要

平成16年度は保存整備事業の2年次であり、周堀東～北～西部分の兆域構造を確定するための調査を実施した。18箇所の調査区（26T～43T）を適宜設定した。調査面積は約1200㎡である。また、委員会の指導に基づき、15年度に調査した17Tの埴輪立替例について、型取り委託を実施した。

（1）調査概要

26・27トレンチ／後円部側兆域および内堀のなかに存在する北東中島を確認するために設定した。外堀・内堤・内堀・墳丘下段の関係を把握するとともに、北西中島の規模（直径18m）・構造（葺石）と位置を確定した。

28・29トレンチ／南東中島の規模（直径18m）と位置を確定した。中島周囲の内堀内からは円筒埴輪・須恵器や土師器が出土し、中島においてこれらの土器を使った儀礼が行われたと推定される。

30トレンチ／後円部北側の兆域構造を調査した。外堀の存在を確認するとともに、外堀・内堤・内堀の規模を把握した。

31・33トレンチ／面的に覆土を除去し、北中島を全面調査した。中島は直径18mの円形で、斜面に葺石を施す。外周の堀内からは、円筒埴輪片・家形埴輪・須恵器片などを検出した。北東中島と同様に、ここでも土器を用いた儀礼が執行されたと考えられる。なお中島の上部は削平されており本来の高さは不明である。

34～38トレンチ／内堤の北西部では、昭和5年の東京帝室博物館の調査時に人物埴輪の破片が定量検出されており、ここに人物・動物埴輪配列区の存在が指摘されてきた。これを確かめるために34～38Tを連続して設置した。しかしながら、内堤上面は削平によって埴輪の情報は存在せず、両側の内堀・外堀に転落した埴輪のなかにも形象埴輪の破片はきわめて少量であった。したがって、この部分に人物動物埴輪が配列された区画が存在したかは確定できなかった。

39トレンチ／内堀の北側隅角を確認するために設定した調査区であり、予想通りの位置に隅角を検出した。

40トレンチ／外堀の北側隅角を確認するための調査区であるが、古代（平安時代頃）の大溝が走行しており、既に古墳時代の遺構は破壊されていた。

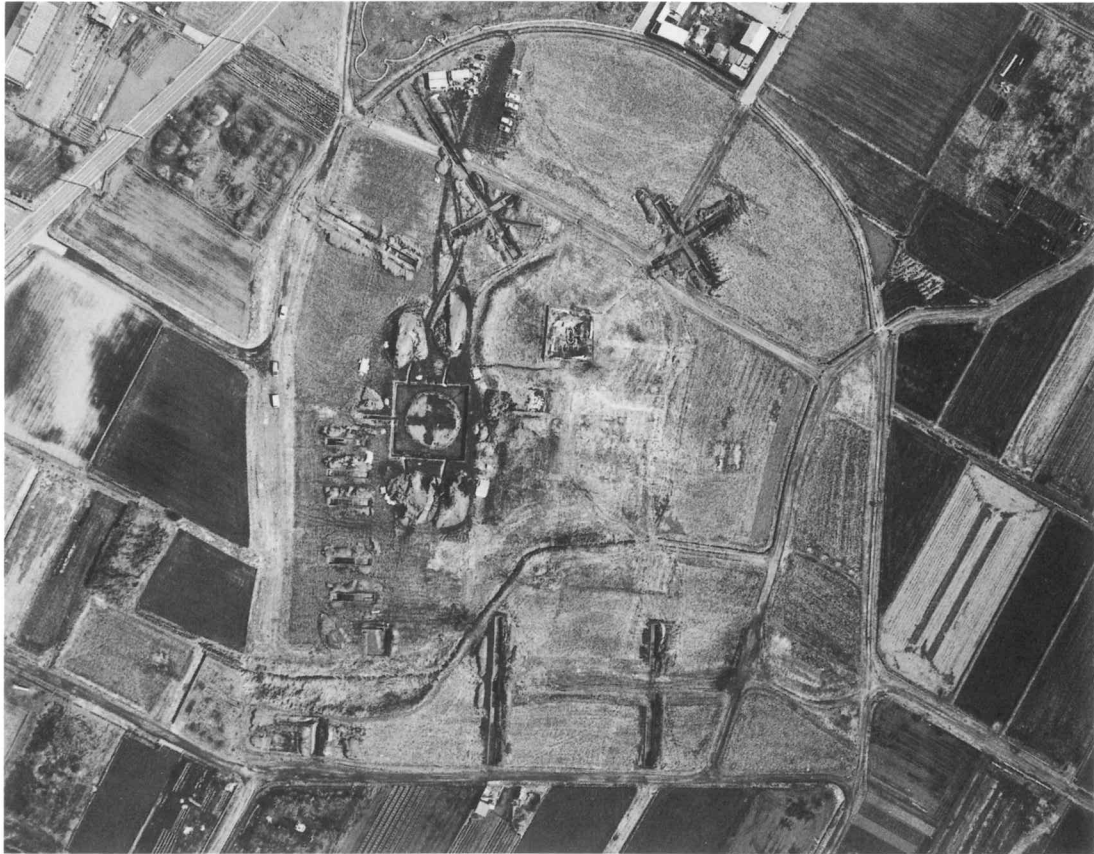
41・42トレンチ／前方部側の兆域を確認するための調査区である。ただし、内堤に相当する部分には中世に開削された大溝が南北に横断しており、破壊が著しい。このうち41Tでは、内堀の立ち上がり、外堀の西側立ち上がりを確定したが、内堤の西半部は大溝によって破壊されていた。

10トレンチ／主体部の調査を15年度に引き続いて実施した。石棺の回りに積まれた昭和初期の石垣を撤去するとともに、石棺周囲の攪乱穴を掘り下げた。この結果、①石棺の盗掘がおそらく中世に行われたこと、②昭和5年の東京帝室博物館の調査の後に、石棺本体が破壊・移動され、その後に現況に復された事が判明した。なお、掘削土砂は全て保存し、篩い作業および水洗選別作業を行ったところ、細片遺物を多量に検出した。

調査と併行して遺構測量・航空写真撮影委託を実施し、調査終了後には葺石部分は土嚢を積んで養生し、調査区全体に苦土石灰を散布して埋め戻した。また、調査と併行して一部の遺物整理作業を実施した。3月には整備委員会を実施し、石棺の調査をさらに行うことや整備の方向性について指導がなされた。つづいて報道の後に現地説明会を実施し、約440人が見学した。

（2）小結

この調査によって、3ヶ所の中島施設の位置と内容、および北半部分の兆域構造を確定することができた。中島からは須恵器が出土したため、古墳築造時期の特定材料として有効である。また須恵器は、焼成時に変形・発泡したものが含まれることから、在地産の可能性が考えられる。当地域における須恵器窯創業の始原を考えるうえで重要な資料となった。一方、期待された中堤上の形象埴輪配列区を特定することはできなかった。



兆域北半部調査の全景航空写真



北側兆域の調査 (30トレンチ)



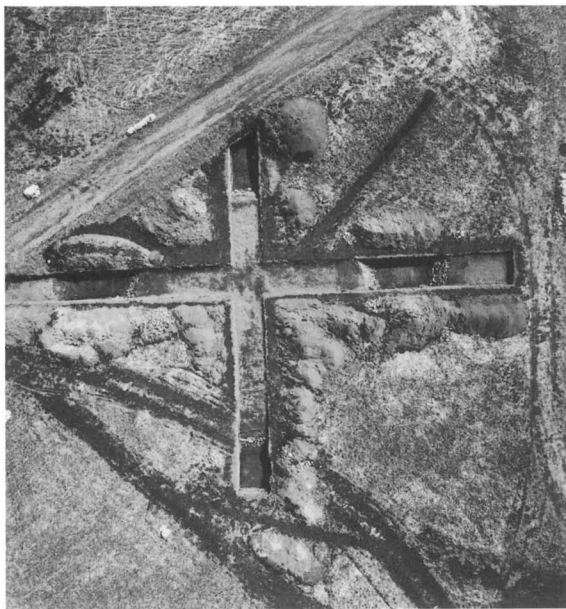
北側兆域の調査 (36トレンチ)



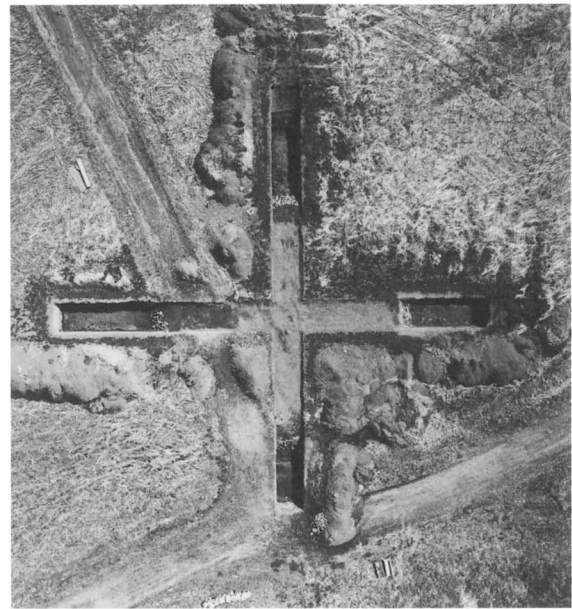
内堀の北隅角 (39トレンチ・東から)



北中島全景 (31トレンチ)



北東中島航空写真 (26・27トレンチ)



南東中島航空写真 (28・29トレンチ)



葺石接近写真 (26トレンチ、墳丘下段と北東中島)



北中島調査風景 (31トレンチ)



墳頂部石棺（周囲の石積みを除去し、攪乱を掘り下げ。10トレンチ）



北中島遺物出土状態（31トレンチ）



墳頂部攪乱内出土の石棺蓋残片（10トレンチ）



内堀内の土層（39トレンチ。最下部にF A層）



石棺周辺土壌の水洗選別による遺物検出風景



墳丘中段埴輪列の立て直し事例の型取り作業



埋め戻し作業（葺石は土嚢で養生）

5. 平成17年度事業の概要

平成17年度は二子山古墳保存整備事業の3年次である。周堀南～西部分の兆域構造を確定するため、7箇所
の調査区（44T～50T）を設定した。調査面積は約500㎡である。また、委員会の指導に基づき、16年度に引
き続いて石棺の調査を進め、調査終了後には石棺の保存処理も行った。調査期間が雨期に掛かったため、湧水
に苦しめられた。

加えて3ヵ年の調査データを集約し、整備基本設計および実施設計を行った。

（1）調査概要

44トレンチ／後円部側兆域を確認するために設定し、外堀・内堤・内堀の関係を把握した。

45・46トレンチ／南中島の規模（直径18m）と位置を確定するとともに、外堀・内堤・内堀の状況を確認し
た。中島の斜面には葺石が施され、周囲からは円筒埴輪片が検出された。ただし中島上面は削平されており、
上部構造は不明であった。

47トレンチ／前方部側の内堤および外堀の位置を確定した。

48トレンチ／内堀の隅角の検出を目的に設置した調査区であるが、既に中世の大溝によって古墳時代遺構は
破壊され、かつ産業廃棄物で埋め立てられており、所期の目的を達することはできなかった。

49・50トレンチ／前方部外堀の隅角の検出を目的とした調査区である。外堀内側の隅角部は既に中世の溝で
破壊されていたが、外堀外側の隅角部は50Tにおいて検出することができた。50Tから47Tにかけては、榛名
山F A テフラの堆積の後に、F A 泥流が堀内に流入している様子が確認されている。

10トレンチ／15・16年度に引き続いて主体部の調査を継続した。委員会の指導に基づき、石棺南辺に接した
礫を除去し掘り下げたところ、石棺の長辺に2個の縄掛突起が確認された。また、石棺（第一主体部）の北側
を精査したところ、竪穴式石槨（第二主体部）の残骸を検出するに至った。この石槨は全体の4分の1程しか
残存しないが、構築レベルが石棺より高く、後出するものである。なお、掘削土砂は全て保存し、篩い作業お
よび水洗選別作業を行ったところ、細片遺物を多量に検出した。調査が終了した後には石棺の保存処理委託を
実施し、薬剤による強化を行った後に、脆弱部をサポートする処置を施した。

調査と併行して遺構測量・航空写真撮影委託を実施した。また調査終了後には、葺石部分を土嚢によって養
生するとともに、調査区全体に苦土石灰を散布して埋め戻した。また、調査の終了後は遺物整理を行い、主体
部周辺出土遺物の分類や、埴輪の洗浄・注記・接合作業を進めた。

10月には整備委員会を実施し、現地見学とともに、基本設計案を審議していただいた。その結果をもとに実
施設計を策定した。また、報道の後に現地説明会を実施したところ約1000人の来訪者でにぎわった。

（2）設計業務

指名競争入札によって設計業者を決定し、7月から設計業務に着手した。基本設計は7月から10月まで行い、
整備概要、整備工程、整備概算経費を算出のうえ、10月の整備委員会に諮って検討していただいた。その後、
整備委員会の指摘事項を反映させたうえで、11月から3月まで実施設計を行った。

設計の方針は大きく次の4点である。①墳丘部については基本的に現況のまま整備する。ただし、墳形を大
きく損なっている後円部東部と前方部前面については盛土による形状の復元を行う。②これに伴って、前方部
を開削している現況農業水路を移設する。移設先は、中世の大溝に該当する攪乱部分とする。③兆域部につい
ては盛土による立体表現とする。ただし、50cm内外の低い段差で内堤・外堤・中島を表示する。④主体部石棺
は保存処理ののちに埋め戻しを行い、その上に原寸大陶板写真パネルを設置する。これに加えて、園路計画・
施設計画・サイン計画・植栽計画について詳細設計を行い、実施設計を完成させた。



兆域南半部調査の全景航空写真



南中島航空写真 (45・46トレンチ)



南側兆域の調査 (46トレンチ)



南東側兆域の調査 (44トレンチ)



外堀の南隅角部 (50トレンチ、南から)



墳頂部10トレンチ全景航空写真（中央が第一主体部舟形石棺、左方に第二主体部残骸）



墳頂部舟形石棺（南側石積みの除去後。東から）



墳頂部舟形石棺（南東から）



墳頂部舟形石棺（南から）



現地説明会風景



墳頂部舟形石棺（西から）



竪穴式石槨（第二主体部）



出土資料整理風景



整備委員会風景

6. まとめ

① 墳丘構造

史跡保渡田古墳群・井出二子山古墳は、3段築成の前方後円墳である。墳丘下段の旧地表部分での計測では、墳長108m、後円部直径70m、くびれ部幅44m、前方部幅67mを測る。旧地表面からの後円部高は9mであり、削平されているためにあと1m以上は加算されるであろう。

② 兆域構造

兆域は、内堀、内堀内の中島4基、内堤、外堀、外堤から構成される。ただし、外堤は縁辺に行くほど盛土が薄くなって消失するので、明確な幅は不明である。このため、兆域規模は外堀立ち上がりで計測せざるをえないが、これによると総長215m、総幅173mとなる。外堤を含めれば、実際はそれより一回り大きい墓域を選定していたことになる。また南西外堀はやや変形し、狭くなっている。

③ 墳丘規格

下段の墳形は前方部がやや短く、くびれ部の切れ込みが大きい平面形態である。北東に隣接する八幡塚古墳とは企画が異なる。なお、北方の薬師塚古墳とは同規模・同規格である可能性が高い。

④ 円筒埴輪

円筒埴輪で原位置をとどめるものは多くない。また原形に復せる物も少ないが、最大で5条6段構成の大型品がみられる。しかし、総じて法量や属性が多様であり、円筒埴輪製作体制が完備されていない様子が窺える。製作組織は、次の八幡塚古墳段階で急速に整備されている。円筒埴輪はその出土状態から見て、墳丘各段のテラス、中島外周、内堤外縁2列、外堤に樹立されていたと考えられ、八幡塚古墳の推定6000本を上回る可能性が高い。なお、円筒埴輪にB種横刷毛技法はきわめて少なく、総じて円筒埴輪編年Ⅴ期の特徴を示す。

⑤ 形象埴輪

形象埴輪は、これまでに墳丘から転落したとみられる蓋形埴輪が知られているが、今回は兆域北側の内堤周囲を中心として、人物埴輪・馬形埴輪の小破片がみられた。ただし、配列区が特定できるような濃密な分布状況を示していない。また、北中島からは家形埴輪の破片が出土している。

⑥ 供献土器

土器類は、北中島・南東中島で検出された。須恵器が卓越し、大甕、壺、直口壺、器台、甗、無蓋高坏などが見られる。胎土・色調は多様であり、なかには窯内で変形・発泡した個体も含まれ、在地窯の存在を強く示唆する内容である。型式属性は、TK208型式の特徴を見せるものもあるが在地窯における古い属性の残存である可能性があり、多くの器種はTK23型式からTK47型式の幅で理解するのが妥当とみられる。

⑦ 火山灰

周堀底には、わずかな間層をはさんで榛名山FAテフラの純堆積がみられた。

⑧ 第1主体部

第1主体部は、古墳の主軸上の後円部中心に設けられたもので、長方形の二段墓壇（7.5×5.3m）に凝灰岩製舟形石棺を設置し、墓壇内を礫で充填するものである。棺身部は長さ3m、幅1.2m、高さ0.7m（突起含まず）で、保渡田古墳群の他の2古墳の石棺とほぼ同長（やや細身）である。棺身部においては、東小口面に2箇所、長側面に2箇所の縄掛突起を造作する。西小口面には突起はないが、棺西部に遺物埋納空間を設けたために省略または切除したものであろう。現在、上毛野地域のおよそ20例の舟形石棺において、東側小口の2突起と長辺2突起を造作する棺は、本例以外に認められない。棺蓋はその破片が周辺の盗掘穴の中に散乱していた。しかし、パーツが揃わないため、突起の属性など全体像は不詳である。なお、石棺の石材は高崎市岩野谷丘陵（観音山）に産する「館（たて）凝灰岩」である。

ところで、第1主体部の盗掘は中世に行われたとみられ、その後昭和初期にいたるまで数回の改変を受けているようである。現在の棺身は、昭和5年の東京帝室博物館の調査の後に一度動かされ、破碎されたものを、

その後現在位置に復したものであり、その時期は昭和5年から数年のうちと思われる。礫の状態で、概ね原位置に復されたと見てよい。

⑨ 第2主体部

もうひとつの埋葬部は、第1主体部の北に併行して設けられた竪穴式石槨であるが、大半が破壊され、幅・長さともに不詳である。第1主体部よりも構築レベルが高いため、後出するものとみてよい。地元伝承では「明治期の三角点設置の際に棺が開封された」とされるが、伝承される主体部はこの石槨であった可能性が高い（実際に現在の三角点下から検出された）。

⑩ 副葬品

原位置から出土した副葬品は皆無であるが、石槨周辺の攪乱土を水洗選別したところ、多量の断片遺物が採取された。なかでも、金製の箔状装飾部品・涙形の雲母製部品・銅線をコイル状に巻いた装具の破片などは未知の装飾品の存在を示唆する。また、花形の銅製飾金具断片・歩揺・ガラス部品は、冠または飾履である可能性が高い。玉類では細身の碧玉製管玉、青・黄色のガラス玉多数がみられる。馬具では鉄地金銅張f字形鏡板・同剣菱形杏葉・同辻金具・鉄製壺鍔などがあるが、型式属性から三時期のものが混在し、5世紀後半代から6世紀までの幅をもつ。このことは、複数の竪穴系主体部（数回の追葬）の存在を示唆する。武器では、直刀刀身と鱗状の装飾をもつ刀装具片、槍、長頸鍔が、武具では桂甲小札、金銅装の胡籥がある。工具では、鉄製刀子、ミニチュア農工具（鎌・鋤・斧）が認められる。これらは同時期の古墳副葬品をほぼ網羅しているといえる。

⑪ 小結

本古墳は5世紀後半に築造された大型前方後円墳である。上に述べたように、広大な兆域を保有し、多量の葺石・刳貫式石棺・内容の充実した副葬品・数量の卓越した円筒埴輪・関東でも古式に属する人物・動物埴輪・古式須恵器など、この時期の前方後円墳の属性を完備することが判明した。名実ともに、この時期の上毛野地域の古墳を代表する内容であるといえる。首長居館三ツ寺I遺跡の造営にかかわり、渡来文化を導入して、当地の地域形成を強力に推し進めた人物の奥津城と想定することが妥当であろう。

また、今回の調査によって本古墳の構造および歴史的内容が明らかとなり、整備事業のための十分なデータを得ることができた。これをもとに整備委員会の指導を得て、工事の設計業務までを完了したところである。平成18年からは整備工事を実施し、数年後には八幡塚古墳、かみつけの里博物館とあわせ、歴史公園上毛野はにわの里公園前期事業12.9ヘクタールが完成することとなる。



二子山古墳整備完成予想図（基本設計時）

抄 録

フリガナ	シセキホドタコフンゲン イデフタゴヤマコフン
書名	史跡保渡田古墳群 井出二子山古墳
副書名	史跡保存修理に伴う発掘調査概報
巻次	
シリーズ名	高崎市文化財調査報告書
シリーズ番号	第205集
編著者名	若狭 徹
編集機関	高崎市教育委員会 〒370-8501 群馬県高崎市高松町35-1
発行機関	同上
発行年月日	2006年3月

フリガナ・所収遺跡名	フリガナ・所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
イデフタゴヤマコフン	クニマケンタカサキシイデマチ	10202	旧群馬町 古墳53	36° 22'31"	138° 59'13"	2003.10.1	2900㎡	史跡整備
井出二子山古墳	群馬県高崎市井出町					2005.11.1		

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
井出二子山古墳	前方後円墳	古墳時代	墳丘・内堀・内堤・ 外堀・外堤・中島・ 石棺・石槨・葺石	装身具・馬具・武器・武 具・農工具・円筒埴輪・ 形象埴輪・土師器・須恵 器	榛名山F A堆積

高崎市埋蔵文化財調査報告書第205集

史跡保渡田古墳群 井出二子山古墳

－ 史跡保存修理事業に伴う発掘調査概報 －

印刷日 平成18年 3 月10日

発行日 平成18年 3 月20日

発 行 高崎市教育委員会
群馬県高崎市高松町35-1

印 刷 荒瀬印刷株式会社